

内閣総理大臣賞・農林水産大臣賞

下集落支援事業委員会（京都府南丹市）



〈 にんにくの出荷作業 〉

〈 伝統食の継承を 〉

〈 炭焼きに魅せられて 〉

〈 留学センター卒業生188名の人形 〉

【概 要】

（１）むらづくりの動機・背景

美山町は、南丹市の北東部に位置し、下区は美山町の中でも中心部から離れた地域にある。36世帯、人口68人、高齢化率47.1%と少子高齢化が進み、小学校も統合・廃校となり、耕作放棄地が発生する恐れや、地元行事の継続にも支障が出ており、住民の中で集落の維持と存続に危機感が広がっていた。

平成25年、南丹市の過疎化・高齢化対策補助金制度を契機に、地区住民内の集落活性取組への機運が高まり、地区住民が生きがいを持って健康で明るく暮らしていける地域づくりを目指し、「下集落支援事業委員会」を設立した。

（２）むらづくりの内容

下集落支援事業委員会の元に、農業、食文化、伝統文化、交流の4部門でチームを編成し、集落全体で事業を推進している。

農業、食文化チームでは、耕作放棄地対策を兼ねて農産物の栽培に取り組み、九条ねぎや、収益率の高いにんにくを栽培、出来も良く好評を得ている。また、高齢農家の水田の機械作業を請け負う等、農地の維持に努めるとともに、民間企業への農作業委託により、集落の農地全域にドローンを使った農薬散布を試みる等、効率化・省力化、新たな手法、技術を柔軟に取り入れている。さらに、地域おこし協力隊員が地区内で新たにさつまいも農業を始め、農地の保全のみならず農業体験イベントを行う等、農業の楽しさを内外にPRしており、今後の農業の担い手として希望となっている。

また、女性が中心となり、伝統食の「鯖のなれ寿司」や地元産もち米を使用した「のし餅」等の加工品の商品化に励み、技術の継承や世代間の融合も図られている。

伝統文化、交流チームでは、炭焼き文化復活の為、新たに「炭焼き窯」を作り、技術を持つ高齢者を中心に質の高い木炭の製作に取り組んだ。そんな炭焼きの奥深さに魅せられた若い女性グループが炭焼きガールズとして技術を学び真剣に取り組んでいる。

山村留学センターではこれまでに188名の小学生の成長を集落全体でサポートしてきており、地域外を受け入れる寛容さや柔軟性を備えている。また、京都や大阪の教育団体と連携し農園の運営や定期的な交流活動を行う等、意欲的に地域外ファンづくりを行い、地域住民の活気や「おもてなし」の心、地域への誇りを持続させているほか、村のシンボル「不動尊の滝」に450年続く伝統文化の継承や、新たに発見された「下村城跡」の情報発信を通じた観光による活性化にも取り組んでいる。

こうした取組を進める過程で生まれつつある効果は、集落の絆が深まってきた事であり、世代を超えての深い交流や語らい、笑顔がこれまで以上に増えてきた。また、地域住民に誇りと自信が生まれ、先人が大切にしてきた伝統や文化、技の継承を通して、集落を見つめ直す契機にもなった。そして、地域外を含め、様々な方々との交流の中で新たな風が入り、集落の活性化に成功している。

農林水産大臣賞

早崎町自治会（滋賀県長浜市）



（魚道の設置（魚のゆりかご水田））



（ビオトープに飛来するコハクチョウ）



（小学生のビオトープ観察会）

【概 要】

（１）むらづくりの動機・背景

琵琶湖に接した当町は、昭和30年代の食糧増産政策により早崎内湖が干拓地化され、集落の水田面積は拡大したが、干拓地特有の粘質土壌による稲の倒伏、トラクタ・田植機等の沈み込み、さらに干拓地の排水ポンプ経費等高額な維持管理費用から集落農業の存続に危機感をいだいていた。加えて、高齢化の進展による後継者問題を抱える中であって、早崎町住民全員で構成する多面的機能支払制度の活動組織「早崎・農地水環境守ろう会」や、町内有志で構成し、早崎内湖の環境保全活動を担うNPO「早崎ビオトープネットワーク」の設立により、集落の活性化につながる取り組みが始まった。

（２）むらづくりの内容

干拓地という生産面で不利な本地区は、農林水産省補助事業の活用による農業施設整備や多面的機能支払制度の取組により集落ぐるみで農村環境を守っている。

「早崎・農地水環境守ろう会」は国の補助事業が始まった平成19年当初から多面的機能支払制度に取り組み、現在の対象面積は64.7haで県内平均38.3haの約2倍と県下屈指の面積を誇っている。

特に同会では、農業者のみならず、自治会、老人クラブ（長寿会）、子ども会等、非農家も含む地域住民が一丸となって、農地の保全、農漁業の振興、地産地消の推進、都市住民との交流などを実践している。その中でも「魚のゆりかご水田」は、琵琶湖に近い水田排水路に手作りの魚道を設置し、フナやナマズ等の湖魚を水田内に遡上産卵させ稚魚を琵琶湖に戻す仕組みで、ここで収穫した「魚のゆりかご水田米」は、東京や大阪等に直売している。

また、水田ニゴロブナ繁殖事業（水田に稚魚を放流育成し琵琶湖に戻す事業）に取り組むなど住民が一体となって農地での水産資源の保全にも取り組んでいる。

さらに「早崎ビオトープネットワーク」ではビオトープゾーンでの自然観察会を主催するなど自然との共生に一役を担っており、早崎町住民の自然環境に対する意識は高い。

また、地域コミュニティ活動や高齢化・少子化対策としての相互援助活動に取り組む「早崎福祉JHの会」を立ち上げ地域に寄り添った福祉活動を展開するなど、子どもから高齢者まで集落ぐるみで風通しの良いむらづくりに励んでいる。

このように集落だけの取組にとどまらない一連の活動は、都市住民、消費者、次代を担う世代など幅広い層との関係人口の増加に寄与するとともに、高齢化が進展し農業人口が減少していく農村において持続可能で発展的な環境活動を核としたむらづくりを実践している。